

國學院大學學術情報リポジトリ

A Qualitative Study on University Museums in Taiwan by Examining National Taiwan University Museums

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Chau, Hoining メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000447

台湾における大学博物館の一考察

—「国立台湾大学博物館群」を中心に—

鄒 海寧

はじめに

台湾は、日清戦争で清朝の敗戦により締結された下関条約によって1895年から日本の植民地となった。日本の統治期間は、第二次世界大戦の敗戦によるポツダム宣言によって中華民国に編入された1945年までの50年間であった。19世紀末に台湾総督府が設置されて以来、台湾産業の育成、交通施設の整備、学校教育の普及などによって、台湾の近代化は推進された。台湾における教育の基盤は、日本の統治時代に制度化がなされたと言われている。中でも、日本の旧制帝国大学の7番目として、1928年に設立された台北帝国大学は、台湾における近代大学の嚆矢とされる教育機関である。

同時にまた、台湾の博物館事業も日本の統治と深い関係があることも事実である。1899年に台湾総督府の民政部殖産局は、台北に商品陳列館を設置し、1908年には台湾の南北縦貫鉄道全線開通の記念事業として、台湾総督府民政部殖産局附属博物館と改称して開館した歴史を有する。その後、台湾総督府博物館、台湾省立博物館と名称をそれぞれ変更し、さらに1999年に台湾省の廃止にともない国立台湾博物館と改称し、台湾における最初の国立博物館となったのである⁽¹⁾。

近年、台湾政府は博物館及び博物館学の振興に力を注いでいるのが、現状であると言えよう。1980年より、台湾政府の主導による全台湾の基礎建設計画である「12項建設計画」の実施によって、台中の国立自然科学博物館・台東の国立台湾史前文化博物館・屏東の国立海洋生博物館などの大型の国立博物館が建設され、台湾博物館の発展に大きな影響を与える結果となったといえよう。現在、台湾の博物館数は、すでに300館以上に膨れ上がり、今後も増加し続ける状況を呈している。

前述した国立博物館以外、最近「歴史の発見と再構築」の提唱による地域文化に関する研究の展開とともに、地域博物館が徐々に建設されつつある点が台湾の博物館の特徴である⁽²⁾。

大学博物館は、1928年に設置された台北帝国大学の動物標本室が台湾における初めての大学博物館と見られる。その後、国立台湾大学に改称されてから、学内の博物館が徐々に増加し、より大學博物館の資源を有効的な利用するため、大学側の承認を得る大学図書館の主導による2007年11月15日には「国立台湾大学博物館群」を成立するに至っている⁽³⁾。台北帝国大学時代の標本室から現在の国立台湾大学の博物館群までの沿革を顧みることによって、大学博物館は、社会の発展とともにその役割も変化してきたと思われる。また、学内の博物館を統合している国立台湾大学博物館群のような、日本にはなかなか見られない大学博物館の運営方法について、今後の大学博物館のあり方を考えるときの参考となる先行事例と考えるところから本稿を記すものである。

近年、台湾の博物館に関する研究は、急速に増加の一途を辿っているが、大学博物館に関しては未だに注目されていないのが、台湾・中国・日本での博物館学研究の現状である。

そこで、本稿では、台湾における大学博物館の歴史を概観し、中でも1928年に創立された台湾初の総合大学である台北帝国大学、即ち現在の国立台湾大学における博物館を中心に大学博物館の沿革と現況を考察し、台北帝国大学から国立台湾大学への変遷によって、大学博物館が変化していった経緯を明らかにするとともに、大学博物館の役割について検討し、さらに「国立台湾大学博物館群」を通して大学博物館のあり方を論及することを目的とする。

さらにまた、大学附属博物館史を明らかにすることにより、台湾全体の博物館史構築の基本資料となることを期待するものである。

1. 台湾の大学博物館の歴史

台湾における私立博物館の嚆矢とされるのは、カナダ人の宣教師である馬偕 (George Leslie Mackay) が設立した讀書樓内の博物館である⁽⁴⁾。馬偕は、1875年に自分の居住地である淡水に宣教師寮を建設し、その後住所の東側に2階建ての讀書樓 (日本で云うところの書齋) も建設した。当該樓内には、馬偕の研究室と博物館が同時に設置されたと伝えられている。『台湾遥寄』 (*From Far Formosa: the island, its people and missions*) によれば、馬偕は研究室と博物館に、虫眼鏡・地図・顕微鏡・植物標本・動物標本・原住民の資料などを収集していたと記されている⁽⁵⁾。その後1882年に、馬偕は故郷であるカナダで資金を集めて、台湾で初めての西洋教育が行われた「理学堂大書院 (牛津学堂)」 (Oxford College) が開設された。これを契機に、馬偕は讀書樓の研究室と博物館を学生に開放し、牛津学堂の学生を対象に教育活動を行った。

ちなみに、馬偕の日記には、1896年には当時の台湾総督であった乃木希典の訪問を受けたこともあったと記されている。

1901年に馬偕が亡くなって以後、讀書楼は住宅用途に変更され、かつ馬偕のコレクションが戦乱で散失したこともあって、残念ながら博物館としての機能が失った。とはいえ、馬偕の讀書楼内の博物館は、学校のために設置されたものではないが、牛津学堂の学生に開放して実物教育を行ったことは、台湾における博物館の教育活動の嚆矢と考えてもよいであろう。

その後、牛津学堂の後身である真理大学は、2016年に学校の創設者である馬偕を記念するために学内にある馬偕故居を整備し、馬偕記念館として公開した。館内に写真やパネルなどを通じて馬偕の生涯について展示している。また、同じ学内にある牛津学堂は、真理大学校史館、馬偕記念資料館、北部台湾基督長老教会史蹟館として一般に公開されている。

さらに国立台湾大学は、日本植民地時代の唯一の大学として、台北帝国大学時代に教学と研究目的で学内に動物標本室、植物標本室、昆虫標本室、土俗・人種学講座標本室の四つの標本室を設置した台湾における最初の大学付属博物館であった。

1962年に創設された中国文化大学は、1963年に学内での中華文物陳列館の設置を経て、1971年に台湾における最初となる大学総合博物館を成立した。現在の華岡博物館と呼ばれる大学博物館は、1991年にリニューアルした施設であり、中国と西洋の美術品をはじめ、芸術写真や民俗文物などの幅広い資料を収蔵している。さらなる華岡博物館の特徴は、常設展示以外に学内の建築系、美術系などと連携し、常に学生の研究成果や卒業制作作品などの展示を行っている点を特徴とする。

2009年の時点で、台湾には164校の大学があり、その中の約90大学には付属博物館が設置されている⁽⁶⁾。中でも、後述の国立台湾大学以外、台湾南部にある国立成功大学も大学博物館の設置と運営に力を入れているようである。国立成功大学の前身は、1930年代に台湾総督府によって設けられた「台南高等工業学校」であり、大学は1956年に創設されている。1969年に歴史学科の増設とともに学内に歴史博物館を設置し、2007年以降の国立成功大学博物館をはじめ、人文系、理工系などの博物館の設置も続いている。学内の博物館の増加に伴い、大学構内博物館群を構成するに至っている。さらに、海外の大学博物館との連携、博物館に関する研究著作の出版など、大学博物館の運営や研究などに対しても積極的な姿が見られる点が大きな特徴である⁽⁷⁾。

2. 国立台湾大学の博物館

2.1. 博物館の成立と変容

台北帝国大学は、日本の南方の辺境に位置する植民地大学とし、南進政策を推進するために設立された、特殊な位置付けによる設立過程を有している。幣原は、『台湾時報』の「台湾の学術的価値」において次のように述べている⁽⁸⁾。

台湾は、日本の領土中、一步南洋に踏出してゐる唯一の足場である。さうして人文科学の上にも、自然科学の上にも莫大な価値を示してゐる。台湾は、熱帯に踏出てゐる上に、垂直てきには、温帯はおろか、更に寒帯にまで手を延ばしてゐる。それ故植物・動物学・医学・気象学。その他百般の自然科学の研究には、或点に於て、世界に類例稀れなる好対象を提供してゐる。更にこれを地平線的に観察すると、東には太平洋とその民族があり、西より南にかけては、南支南洋の錯雑せる民族がある。台湾は、これ等の民族の中間に介在して、諸種の文化を包容してゐる。而して日本国民が、この地を開発すべき位置に立つて、學術的踏査を進めて見ると、中には上代の旧友に邂逅するやうな感を生ずることがある。かくして台湾は、民族学・言語学・文学・史学・その他あらゆる人文科学の研究にも、また得難い好対象を提供してゐるのである。

これによれば、台北帝国大学は、台湾の地理的条件を通じて主要な研究対象として、東洋・南洋における資料を収集し調査・研究を行った。中でも、文政学部では、ほかの帝国大学には見られない南洋史学講座を設置し、台湾史・南洋史・日本と南洋の關係史などの研究を行った。植物学や生物学などの研究には実物資料としての學術標本が不可欠であるところから、理農学部では台湾の熱帯・亜熱帯の農業を研究するために、多量の動物資料と植物資料を調査収集し、また學術標本として保存した上で実物教育を実施するために各講座に標本室を併存していた。それらは、植物標本室・動物標本室・昆虫標本室・土俗学人種学講座標本室の4つの標本室であった。こうした標本室の標本と資料は、現在でも台湾に関する重要な研究資料であり、大学博物館の展示の中心となっている。

植物標本館

台北帝国大学の理農学部の植物分類学の講座を担当し、また台北植物園長を兼任した工藤裕舜は、「私は第一に台湾の植物界を完全に調査する。第二南支南洋に手を伸ばして本島との關係を闡明したい」と述べたように、1928年から台湾の植物を中心に標本の採集と研究を行っていた⁽⁹⁾。そして、植物研究に欠かせない標本を収集・保管するために、1929年に学内に植物標本室を設立した。工藤以外の研究者、例えばアジアにおいてラテン語で海外に台湾の植物を紹介する早田文蔵の教えを受けた山本由松は、早田の影響を受けて1923年から台湾における植物採集を続行していた。1928年に植物学講座の助教授になってからは、東台湾の植物についての研究を実施していた。また正宗巖敬は、台湾の高山植物の採集と研究に専念し、1936年に『最新台湾植物総目録』を出版したことも忘れてはならない。

国立台湾大学の博物館表

	博物館	場所	成立年
1.	動物博物館	校総区	1928年
2.	人類学博物館	校総区	1928年
3.	植物標本館	校総区	1929年
4.	昆虫標本館	校総区	1936年
5.	農業陳列館	校総区	1964年
6.	医学人文博物館	城中校区	1998年
7.	物理文物庁	校総区	2005年
8.	校史館	校総区	2005年
9.	檔案館	水源校区	2007年
10.	地質標本館	校総区	2008年

(成立年代順 出典：筆者の作成)

以上の台北帝国大学の理農学部植物分類学講座の教授らによって、標本室の標本収集が系統的に継続され蓄積された資料群が、現在の植物標本館の収蔵資料の基盤となったのである。現在の標本館は、約28万点に及ぶ台湾の植物に関する植物標本と資料を保存し、台湾においても有数なコレクションとして評価されている。植物標本館は、標本館の西側にある温室と野外植物展示区を整備し、館内には台湾植物に関する所蔵資料からの植物標本、書物、版画などを展示している。植物標本館は、研究と教学を中心に学生と研究者のみに開放していたが、2002年以降、一般の人々に植物学の知識を普及するために、野外植物展示区を公開しはじめ、現在標本館全体は一般公開に至っている。

土俗・人類学標本室

1929年に土俗・人類学講座の標本室が開設された。土俗学・人類学講座は、当時アメリカで流行していた歴史人類学の影響を受けて、標本資料の収集を重視し、教育よりも研究を中心とするスタンスを取っていた。講座成立初期、土俗学・人類学の講座教授の移川子之蔵と宮本延人らは、系統的に華南・南洋の民族学と考古学研究に用いる標本を次々に収集していった。また、移川は岩手県遠野市へ赴いて1895年から台湾で原住民の研究を行った伊能嘉矩の遺族を訪問し、伊能の残した手稿や蔵書、また伊能によって採集された貴重な資料である台湾原住民の器具などの譲渡について交渉した⁽¹⁰⁾。この結果、伊能の遺族が標本室へ寄贈した資料は約300点を数えている。中にはアミ族の蒸し壺・服飾・ブヌン族の籠目文様陶器などの台湾原住民の文化を代表する資料は、2010年に設立された現在の人類学博物館の基盤となる収蔵資料となっている⁽¹¹⁾。ほかにも、華南・南洋地域

の民族学と考古学の標本が多く、1945年時点での所蔵標本は、約3,435点を数えると記されている。さらに、標本収集や考古学資料の発掘による調査研究で、土俗学・人種学講座の重要な研究成果として1935年に『台湾高砂族系統所属の研究』が出版されている⁽¹²⁾。

2010年に、校総区にある人類学系館の取り壊しによって、校史館の建物内に転移した人類学博物館は、台北帝国大学時代に収集されたコレクションをもとにして、アジアを中心とした人類学的な資料を展示している。館内には、台北帝国大学時代の土俗学・人種学教室に所属していた移川子之蔵らが収集した資料は当時の木製展示ケースに入れられたまま現在も展示されている。館内の展示は、大きく民族学と考古学に分かれ、考古学の部分はまだ公開されていないが、民族学の展示は台湾原住民に関する標本や美術品など約5,000点の資料を中心に展示を行っている。館内の階段に人類学系の歴史をはじめ、学内の研究者と標本室時期を中心とした写真展示も行っている。2010年のリニューアルオープンがきっかけで、現在の人類学博物館は社会教育を目的とし一般の人々に公開する大学博物館となっている。

昆虫標本館

昆虫標本館は、昆虫学に関する研究と教学を目的とした研究施設で、1936年に昆虫研究所内に設立されたものを前身とする施設である。昆虫標本室のシンボルとなった国蝶（フトオアゲハ）を発見した素木得一は、昆虫標本の充実を図る目的で1918年から台湾全島における昆虫標本の採集により形成されたコレクションは、当該標本室の収蔵資料の基盤となっている⁽¹³⁾。昆虫標本館は、現在約33万点の標本を保存する台湾における有数なコレクションである。館内では、戦前から収集されてきた台湾を中心としたアジアに生息する昆虫標本を展示している以外に、一般公開されていない収蔵庫の標本を研究者に提供すると言った棚橋源太郎が提唱した所謂2元展示を特徴とし、現在も台湾の昆虫学にとって重要な研究機関である。

動物標本室

台北帝国大学時代に成立された標本室は、学術標本の展示を中心とした博物館である。南洋・熱帯地域研究を重視し、講座制を行った台北帝国大学では、講座教授の研究方針によって標本の収集に大きな影響を与えたことは、台北帝国大学の標本室の大きな特徴である。例えば、当時の動物標本室は、哺乳類の専門家である青木によって哺乳類のネズミ類の収集が中心として行われたことなどが、その一例である。

1927年に哺乳類学を専門とし動物学第二講座を担当した青木文一郎は、台北帝国大学に赴任する前にイギリスへ在外研究を行っている。青木と同時期に齧歯類

の系統分類学を専門とした徳田御稔が青木の大英博物館での研究について次のように述べた。

(前略) だが、重要なことは、植民地科学的な機能に博物館が終止符を打ったときに、分類学者はどのような研究をすべきかを、しっかり考えておく必要があるということである。青木氏は、まさにそのことを悟り、それを最大のおみやげにしてイギリスを離れたように思えるのである。

徳田によれば、青木が博物館の重要性を理解する研究者であったことが理解できる。また青木は、博物館の使命や研究機能の必要性を論説したこともある⁽¹⁴⁾。そして、青木は着任してから学内に動物標本室を設置した。現在の生命科学館に設置される動物博物館は、約2万点の台湾に主として生息する鳥類、魚類を含む動物に関する標本を収蔵し、「生命科学新体験」をテーマに掲げた展示を行っている。

展示の具体的一例は、クジラ・象・鳥類などの標本の展示と合わせて、音声効果を利用して動物の特徴を表すことによって、来館者はより動物の生態を理解することができるように工夫がなされている点などが展示の特徴である。

標本室の設置は、研究者が実物資料を研究するための学術研究資料の保管庫としての要素が大きいように思われる。また、標本室で展示される標本や資料などによって専攻学生にとっては、実物教育・直観教授の基盤が学内に設けられている。したがって、当該標本室は、一般公開の目的よりも学生への教学と研究を目的とした施設であった。この点は、大学付属博物館の設置・目的理念に該当する形式の標本室であったと看取されよう。

台湾大学には、現在も日本統治時代の台北帝国大学の標本や資料が保存され、戦前の大学の研究動向と研究成果を示す貴重な資料として、日本植民地時代の帝国大学史や台湾の科学史の研究に多くの情報を提供しているものと考えられる。現在の大学博物館の基盤は、台北帝国大学時代から継承されたものといっても良いであろう。しかしながら、台北帝国大学時代の標本室からの影響を受ける一方で、戦後以降新しく設置された大学博物館は、台北帝国大学時代の標本室とは異なる性格をもっていたと考えられる。

農業陳列館

農業陳列館は、1945年に国立台湾大学に改称されて以降、初めて学内に新しく設置された博物館である。農業陳列館は、前述の台北帝国大学時代からの標本室とは違い、農業に関する標本の収集・保存・研究という目的によるものではなく、台湾の農業について紹介することによって農業の普及や海外の農業国との交流促進を目的として1964年に成立されたのである。そのため、初期の農業陳列館は、

農業生産に関する科学的技術や知識などの展示を行っていた。だが、社会発展とともに、農業の宣伝と交流の機能を失った農業陳列館は、現在子ども向けの農業と食生活の展示とを合わせた体験学習や教育活動の場所となり、台湾大学の農産物と木製品の展示場と売り場としても使用される。農業陳列館の設立によって、台湾大学の大学博物館は、従来の教学と研究を中心とした施設から社会に開かれる大学の窓口として、一般の人々に公開する施設へと変容したのである。

校史館

21世紀に入ると、大学の伝統精神を強調し、大学の歴史を重視する思想に拠り、台湾大学の歴史を物語る文物を収集・保存することを目的とした校史館と檔案館が設置された。現在の台湾大学博物館群の中心となる校史館は、台北帝国大学時代の1931年に竣工された旧総図書館の中央閲覧室を展示場として転用して2005年に開館した施設である。館内の常設展は、台北帝国大学から現在の台湾大学までの沿革を紹介している。広い空間を有する旧図書館の建物を活用した校史館は、十分な展示スペースを確保することができ、常設展示室以外の「川流庁」と題する特別展示室も設けられている。「川流庁」は、卒業生の李華林によって成立された川流基金会からの寄付で設置される展示室である。校史館は、卒業生が母校に帰るときに立ち寄れる核となる場所であり、とくに校史館は大学の歴史に留まるのみではなく学生の生活用品や昔の教材などを通じて学生の授業、娯楽などの大学生活についても展示しているため、母校を訪れる卒業生は学生時代の原風景を確認することができる展示構成となっている。

檔案館

メインキャンパスから離れた水源校区にある檔案館の建物は、旧国防医学院の図書館であった。檔案は、公文書であり、つまり檔案館は台湾大学のアーカイブスセンターなのである。檔案館は、台湾大学に関する公文書などを収蔵・展示している以外に紙資料を中心とした資料の修復も一方でやっている。常設展は、台北帝国大学時代から現在の台湾大学までの公文書の展示を通じて、大学の創立精神・歴史や公文書の収蔵概況などについて紹介している。中でも、檔案館で行っている公文書の修復に関する方法や工具などの展示も行っている点は、特徴的である。校史館と檔案館の両館の成立によって、台湾大学の大学博物館はより学内者を主要な対象とする教育・研究施設から、広く社会に公開する博物館へと発展しつつあると看取される。台北帝国大学時代から収蔵されてきた標本や資料を活用するため、標本と研究資料の展示を中心にする博物館もまた設置されている。それらは、後述する地質標本館と物理文物庁である。

地質標本室

台湾大学校総区内には、現在でも台北帝国大学時代の日本建築が多く残っている。地質系の学舎の裏にある地質標本館の建物は、黒瓦屋根と五角形の窓を特徴とし、台北帝国大学時代から標本の収蔵庫として使用されてきた施設である。台湾大学地質系は、台北帝国大学の理農学部による地質研究の標本をはじめ、教授や学者からの寄贈や教学用途で購入した標本などにより、3,500点以上の化石・鉱物・岩石などの標本類を収蔵している。さらに、地質系内所蔵の標本を有効的に利用できるように、地質系は現存の標本を整理し、2003年に地質標本館を成立し、学内者のみならず一般公開を図ったのである。地質標本館は、化石・鉱物・岩石などの地質学に関する標本と資料を展示し、また野外展示として地質系館の前に岩石公園を設置し、台湾における代表的な岩石標本も展示している。近年、小学校と中学校からの団体見学が増えてきた状況に対し、地質標本館は学外の学生を対象とする教育活動も行っている。

物理文物庁

物理文物庁は、校総区の二号館（台北帝国大学時代の理農学部理化学教室学舎）の教室を整備して展示を行っている。現在、展示場としての教室は、物理系の原子核物理実験室であった。台北帝国大学は、1934年に物理講座教授である荒勝文策により、アジアにおける初めての原子力の加速器の製造に成功した記念となる物理実験室であった。台湾の科学発展に重要な貢献を果たした加速器と核物理実験室を再現するために、物理系は2004年から政府による補助を受けて加速器を再建しはじめ、そして2005年に物理文物庁を開館した。館内には、原子力の加速器をはじめ、原子力・物理学に関する実験機器と実物資料を展示している以外に記録映画として製作される加速器の製作過程の映像も展示している。

医学人文博物館

さらにまた、歴史的建築物を保存する目的で、博物館として整備される例もある。医学部棟は、1907年に近藤十郎の設計による赤レンガ建築でルネサンス後期の様式の建築物で、戦前は東アジアにおいて最大規模の病院であった。1980年に台湾大学医学院と付属病院の拡張工事により、二号館の大講堂が取り壊された後、台北帝国大学時代の医学部の建物は、医学院の敷地内の二号館の本部と西側の一部建物のみが残されていた。このような状況に対し、医学部の関係者から医学院の歴史の象徴として現存の建物を修復・保存すべきだとする提議がなされた。1998年に開館した医学人文博物館は、医学教育に関する資料を収蔵・展示し、台湾医療史研究センターとしての機能も有している研究施設でもある。館内には9つの展示室が設置され、常設展以外定期的に特別展も開催する。常設展は、医学院の沿革と特色をはじめ、台湾医学の発展における貢献を挙げることによって、

来館者に医科学と歴史を認識させる。そして、前述の諸大学博物館は、2007年の博物館群の成立によって、より公開的な施設となり今日に及んでいる。

2.2. 国立台湾大学博物館群の大学付属博物館の特徴

国立台湾大学は、前述のように日本統治時代に設立された台北帝国大学が先駆となる大学である。学内に設置される博物館としての施設は、台北帝国大学時代の建物を利用しているほか、教学ビル内の教室を展示室として再利用している形態が多いため、開館にあたり経費予算が少なく見込める一方で、学内外への周知と来館者を誘致することは困難な状況でもあった。こうした不都合な状況に対し、台北帝国大学時代から現在に至るまでの学術資料を保管し、調査研究の成果を広く一般に公開するために、台湾大学は常套的ともなっている大学総合博物館化を図ることなく、2007年に学内にある10館の博物館からなる「国立台湾大学博物館群」を成立させたのであった。大学から委任される台湾大学図書館は、大学博物館の中心となる校史館の建設をはじめ、博物館群の統合や運営などを行っている。大学博物館の推進事業として、学内において各学部に分散した標本や各博物館の資源を統合していることにより、博物館を通じて大学の社会教育の機能を果たして、博物館内の展示の改善や市民向けの一般公開の催しを行っている⁽¹⁵⁾。

各博物館はキャンパス内に分散しており、中には大学メインキャンパスから離れている場所にある館もある。例えば、医学人文博物館は、キャンパスから遠く離れた台大医院の隣に設立されているため、事前情報無では大学博物館とは気がつかない可能性も高いと言えよう。学外者にとってわかりにくい状況を改善するために、博物館群はパンフレットを配布するほか、ホームページにも各博物館の紹介と位置図を載せている。パンフレットの配布によって、各博物館が学内でバラバラに運営されているように見えるが、学内の博物館をネットワークで結ぶことで、各学部間または外部の人々が掲載の地図や資料などを見ながら見学することができて、利用しやすい環境に整備していることが連携の最大の特徴である。さらに、各博物館のホームページを統合した博物館群のホームページが整備されることによって、国立台湾大学における諸博物館を一挙紹介することができることも特徴である。そのため、学外の人々はインターネットで調べると、大学博物館についてすぐに全体像がわかるため、見学の計画を立てやすいのである。さらにホームページは、中国語以外に英語も整備されるため、海外の学生や研究者以外の一般の観光客を誘致する効果もあると思われる。

博物館群は、2008年に「大学博物館と博物館群」をテーマとして国際シンポジウムを開催し、2011年に東京大学総合研究博物館と特別展示の共催をはじめとし、2013年には京都大学総合博物館と部局間学術交流協定を締結したことによって、動物学・植物学・歴史学をはじめとする研究者の交流や社会連携を含めた博物館活動についてさまざまな共同研究や事業も行っている。以上に代表されるように

海外の大学間の教育・研究のネットワークを促進するため、博物館群は国際交流に力を入れている。

前述の大学博物館の大きな役割の一つとして、学内所蔵の標本などの資料を研究に提供する公開活動である。近年、デジタル技術の発達とデジタルアーカイブの急速な蓄積量の増加に伴い、研究資料の利用性が大幅に上昇したため、数多くの標本や展示資料を大学博物館から持ち出し、広く社会一般の目に触れることができるように、博物館群は積極的に博物館の所蔵資料のデータ化を行いデジタル・ミュージアム (Digital Museum) を設置したのである。

これにより、博物館群のホームページでは、博物館の展示資料のタイトルなどは記載されており、それらをクリックすると展示資料の詳細な内容を閲覧することができる。こうしたデジタル・ミュージアムによって、インターネットが利用できる環境であれば、世界各地から、深夜など博物館が開館していない時間であっても資料の閲覧が可能になる⁽¹⁶⁾。

台湾大学は、90年にも及ぶ長い歴史の中で、動物・植物・地質・原住民などに関する資料を約300万点以上収蔵している。各博物館に分散する学術標本や資料が多数ある状況に対し、学術標本の利用での便利性を図るために、資料のデータベース化が重要であると考えられる。そのため、大学博物館で所蔵される学術標本などの活用を促すことを目的とし、大学における歴史的かつ豊富な学術資源を社会に公開しながら、大学の研究成果を社会に還元するため、台湾大学は、2002年より「台湾大学典藏数位化計画」(Digital Archives Project of National Taiwan University) を行い、学内に所蔵の古文書・写真・公文書・標本などの資料を全面的なデータ化を実施している。現在、植物標本館・昆虫標本館・地質標本館・人類学博物館・動物博物館・物理文物庁・医学人文博物館から、約18万点の民俗資料・医療関係の文物・標本・物理実験資料と文献資料のデジタル化がなされている⁽¹⁷⁾。国立台湾大学のオンラインデータベースでは、分類・整理される資料の検索や抽出などのサービスが提供されることによって、インターネット上で保存・検索・共有などが容易になり、利用者にとっては資料の利用が便利になる。中でも実物資料の劣化を避け、貴重な標本を利用しながらもより良い保存ができるという大きな利点も有している。

前記した通りであるが、博物館の特徴を一つあげるとすれば、それはすべての人に対して情報を伝えることである。これまで博物館が行う事業は、自分で博物館を訪れてくれる人を主な対象としてきた。しかし、近年は博物館に來ない人に対して情報を伝えるために、多くの実在する博物館がオンライン博物館も開設している。博物館群は、さまざまな資料などをデジタル情報に変換し、インターネット上で閲覧できるようにしたデジタル・ミュージアムを設置した。

すなわち、実物資料は展示という反保存行為の束縛から解放されより良い状態で保存できるために、閲覧の制限や期間の限定なくして公開することができるほ

か、展示スペースを気にせずにすべての収蔵品を公開することもできるため、館内の所蔵資料をより有効活用できる方法であると考えられる。殊に台湾大学の博物館は、台北帝国大学時代の建物を利用し、博物館として整備された古建築利用施設が多いため、館内の展示スペースの関係からすべての収蔵品を展示できないことも多くあるようである。このような場合、大きな展示空間が不要になるデジタル・ミュージアムによって、実在する博物館において例え展示の空間不足があっても特別展を行うことができるのである。

例えば、昆虫標本館は、インターネットで2009年に「昆虫の美」と題する特別展を開催したのである。こうしたオンライン展示によって、博物館へのアクセス方法や館内の案内、お知らせなどの博物館に関する情報も提供することで、来館者を実在する博物館への誘致につながると考えられる。

なお、博物館群の構成によって、学内の博物館相互の連携がより容易になるのである。例えば、檔案館と医学人文博物館の連携による所蔵資料の修復や、動物博物館と植物標本館の連携による資料の貸出サービス、夏休みの体験活動などのイベントの開催などによって、博物館の活動がより豊かになっているのである。

博物館群という斬新的な運営方法によって、運営予算の削減や人手不足などの問題を抱える大学博物館において、「コストの最小化、効果の最大化」を実現することが可能になると考えられる。また、博物館群の成立は、大学博物館の「社会に開かれる窓口」として明確的な位置づけの具現であると考えられる。

2.3. 博物館の教育活動

1990年に台湾教育部が公布された「社会教育工作綱要」によれば⁽¹⁸⁾、「博物館の特色を発揮させるため、さまざまな教育活動を通して博物館のもつ資源を活かし、学校教育や家庭教育に応援することにより、教育の理想を实践すること」であると明記されている⁽¹⁹⁾。すなわち、博物館は教育において重要な役割を担っているのである。そして、台湾大学も大学博物館における教育活動を重視する傾向にあり、さまざまな教育活動を行っていることは種々の面から看取されることは縷々記して来たとおりである。

学生ボランティア

大学博物館は、博物館の業務へのサポートと対外的なサービスの向上を目的として在学生のボランティアを取り入れている。博物館に就職志望の学生にとっては、大学博物館における展示室の監視と解説や、事業の補助などの仕事によって、実際の博物館の運営に関連することを学ぶことができる他、博物館の展覧会の作り方・展示作業に立ち会うなど・展覧会ができるまでの広く博物館経営の裏側を知ることができる効果的な就業前の実践教育を受けることができると考えられる。台湾では、未だに日本の学芸員制度のような専門人材の資格や採用制度を導

入していないが⁽²⁰⁾、大学において博物館学の講義の開設や大学院での博物館学
研究科の設置などの他、こうした在学生を対象とするボランティア活動によって、
博物館の人材育成が推進されている。

学校教育の支援

大学博物館は、学外者向けの教育活動も積極的に行い、とくに小学生と中学生
を対象とする夏休みのイベントや体験教室などの博物館の楽しさを伝える活動に
取り組んでいる。農業陳列館は、毎月3～5回のイベントを開催し、長期的に子
ども向けの教育活動を行っている。中でも、折り紙、食べ物作りなどの体験を行
う親子教室は、家族で楽しめるプログラムであり、人気を博す活動となっている。
また、植物標本館は、定期的に植物標本づくりの講座を開催し、標本製作を通
じて子どもに身近な植物の名前や生態について学べる機会を提供している。中で
も、国立台湾大学博物館群は学内博物館の活動を統合して、毎年夏休みに合わせ
て子ども向けの系列的な体験プログラムを行っているのが博物館群における博物
館教育の特質であると言えよう。

こうした活動を通じて、参加者は展示ケースの外から資料を見るだけでなく、
実際に「触る」「使う」「作る」などによって、説明を聞きながら理解を深めての
体験が可能となる。また、子どもたちが遊び感覚の中でモノの性質や使い方を自
力で発見していくプロセスに、教育的効果があると考えられる。そして、体験を
主とする学びではあるが、学習シートなどの持ち帰り用の資料が用意されている
ため、その先へ続く系統的な学びにもつながるのである。

植物標本館と動物博物館の連携により、小学の5年生から中学の7年生までの
学生を対象にして、館蔵の標本資料を活用し、学校教育を支援する「行動展示ボ
ックス」(Loan Box) というプログラムを行っている。大学の研究成果を社会へ還
元する目的で、台湾における独特の動物と植物が存在していることについての理
解が深まるようになる展示ボックスを制作し、各地の学校団体に貸出も行ってい
る。展示ボックスは、「骨の故事」「パンノキの認識と応用」「たまご総動員」「果
子大集合」という四つのテーマに分かれ、ボックス内に用意される展示品(標本
と模型)、教材と活動ハンドブック・教師ハンドブック・学習帳などによって学
校の一般課程以外の授業内容を提供している。さらに、より多くの学校に利用し
てもらうため、博物館は各地で定期的に教師や子どもの体験活動を行っており、
こうした展示ボックスは、貸し出されて学習の役に立つだけでなく、博物館の出
前授業のツールともなる。また、サービスの便利性を求めるため、フェイスブ
ックに展示ケースの計画目的や内容などを公開し、オンラインの貸出手続きを提供
することによって、大学博物館に来ない人々に対し、大学以外でも博物館の資料
を活用して教育活動を行うことが可能となっている。

また、学術的に貴重な標本を収蔵・展示するだけではなく、人々の視野を拡大

し、新しい思考を刺激する知的な空間であるべき場所である大学博物館は、展示方法を工夫しているようである。例えば、地質標本館は、子ども向けの展示コーナーを設置し、文字を少なくして色彩豊かなパネルによって、子どもでも一目でわかるような工夫が各所になされている。物理文物庁に設置される体験コーナーでは、物理系初期の物理実験に使用された工具や教材のハンズオン展示を通じて、来館者は触ることで重量感・質感・操作方法を知るなどの体験を知識として吸収することができ、教育的な効果があると考えられる。こうして、標本と研究資料を中心に展示を行っていても、大学博物館は学外者の知識普及に対して努力したことは全体を通じて強く感じられる。

2.4. 大学博物館の課題

前述の如く、台湾大学の博物館では、子どもや親子を中心にさまざまな教育活動を行っている。これまで博物館の教育活動は、教育の固有な概念によって小学生と中学生を対象とすることが多いに対し、成人教育に対する認識不足で成人学習への支援が余りなされていないのが現状である。しかし、近年博物館に対する教育の期待が高まることで、博物館の中で展示に興味を持ち、課題を見つけ、博物館で出会うことのできる資料・情報などを活用し、自ら学び自ら考えることができることが博物館活動の大きな目的といえるため、あらゆる人の学習場所としての博物館は、大人の学習を支えるべきであると考えられる。故に、大学博物館も大人の研究や学習のために整備することが必要である。例えば、一般の人々にとって、大学の学術研究の成果は手が届かない、近寄りがたい存在となっているため、大学博物館における学術研究の社会還元として、展示を通じて研究成果を紹介すること以外に大人向けの講演会を開催することで最新の研究成果を発表することが必要であり、人々の学習ニーズへの対応、また学問に対する興味を与えるための環境を提供するものと考えられる。こうして、成人学習への関心の高揚によって、成人学習の場としての大学博物館に昇華できるものと期待できよう。

多くの人に大学の存在は知られるようになってきたが、「学生ではないのに、構内に入っても問題ないのか」という疑問をもつ人々は少なからず、学外の人は大学への行くことは多くない状況に対し、大学のキャンパスの中に足を踏み入れることに躊躇する場合も多いように想定される。中でも、台湾大学の大学博物館は、教学ビル内の教室を利用した施設が多いため、博物館群のパンフレットには博物館の所在地の地図があっても、一般の人々にとっては場所を見つけること自体が難しいかもしれない。例えば、昆虫標本室は、昆虫標本研究の2階に所在するところから、所内には教室・研究室など教学施設もあるため、関係者以外立ち入り禁止というイメージが強く、学外者にとっては入りづらい状況になっている恐れが想定される。こうした状況を改善するためには、従来の大学に対して学外者が有する“関係者以外立ち入り禁止”という固定化したイメージを払拭しな

なければならないのである。

医学人文博物館が大学の授業日でない日曜日に開館していないため、利用しづらいことは事実である。また、博物館の人手不足で学内にある小規模の博物館は、昼休みに一時休館をするために開館日であるのに拘わらず時間帯によって見学できないこともある。そのため、学生以外のボランティアを募集することで人手不足を解消することによって、学外の人が見やすい環境と利用しやすい体制を徐々に整えていくことが必要である。

大学の「社会に開かれた窓口」として、社会との接点と位置付けられている大学博物館は、より積極的に学外へ情報発信しなければならない。博物館群のホームページで博物館の紹介や活動の応募などを公開する以外、オープンキャンパスの実施、公開講演会や新本の発表会などの開催を通じてより多くの人々に大学博物館を周知するように努め、より身近な存在とならねばならないのである。また、台湾大学以外の博物館とも連携し、展覧会事業をはじめとする博物館活動を通じて大学の周知にもつながるように、学外の幅広い来館者を集め、効果的な広報展開を可能としなければならないと考える。台湾大学は、台湾の代表的な大学の一つであり、より学外の人々に利用してもらうために、今後学内の出版物だけでなく、雑誌や観光のガイドブックなどに大学博物館の存在を提示することが必要であり、現在までの学外への宣伝が少なかったため学外の人々が把握できないといった現状を是非とも改善しなければならないのである。

また、来館者の利用については、学内にある博物館を巡ることはかなりの時間を要するため、パンフレットには博物館の紹介のほか、農業陳列館にカフェが設置されることを提示する以外、学外の人でも利用できる学生食堂やコンビニなどの施設も紹介することが必要である。また、利用者の利便性向上を目的に、博物館群の中でミュージアムショップを設置した博物館やオリジナル記念品や出版物などの販売についての案内を掲載することも必要である。

現在、人類学博物館と檔案館のみに記念スタンプが設置されているが、付属のすべての博物館で博物館利用の記念として入館記念スタンプの設置が必要である。展示資料から取材したスタンプで、学術情報をコメントとして印刷することによって、情報伝達に効果があると考えられる⁽²¹⁾。また、地質標本館は、記念品として館内における展示資料を紹介する蔵書票を無料で配布している。来館者に学内の博物館の巡回を促すために、各館の特色あるさまざまなスタンプと蔵書票を博物館群内のすべての博物館に用意することは、博物館への誘いの有効な手段の一つであると考えられる。

まとめ

日本の統治時代に台湾に設置された博物館は、台湾総督府博物館を含め9館に

のほった。当時の9館の中で、台北帝国大学における昆虫標本室・動物標本室・植物標本室・土俗・人種学講座の陳列室が現在も存続されている。

台湾における日本植民地時代の博物館を理解するには、台北帝国大学時代の標本室に対する研究が不可欠であると考えられる。台湾大学には、現在も当時の標本室の資料や標本がよく保存され、台北帝国大学の研究動向について多くの情報を提供し、台北帝国大学に関する研究において重要な資料であることは確認するまでもない。

また同時に、台北帝国大学時代の各種施設が状態よく保存されており、それらをそのまま使用した教学施設と博物館を設置する例が多数存在することは日本の大学には認められない台湾大学付属博物館の特質である。

日本の大学付属博物館は、東京大学総合研究博物館に代表され、今日一般的形式ともなった“総合博物館”は文部科学省による「ユニバーシティ・ミュージアム」構想に起因する現象と看取される。しかし、大学付属博物館の設立目的を考えた場合、付属博物館は大学及び学部を象徴するものであるとした場合、多学部・多学科の博物館を1ヶ所に纏めた総合博物館は、当然ながらその印象性は薄れることは確認するまでもない。したがって、国立台湾大学博物館群は、社会に対しても好ましい大学付属博物館の形態と実態であると考えられよう。かかる形態は、台湾に限らず広く欧米・中国に認められる大学付属博物館の形態でもある。

中には、台北帝国大学時代の標本室を継承している以外に、新設置の博物館が数多く存在している。

本稿では、台湾大学の大学博物館の歴史を顧みると同時に、大学博物館は社会発展とともに変化しつつあることを明らかにした。学内者を主な対象として教学と研究目的を主眼として設置された台北帝国大学の標本室は、現在でも研究機関としての存在には変わりがないが、戦後は社会的な要請に対応しての一般公開されている博物館として明確に位置付けられ、学外者への情報発信や教育活動などを行うことによって、学外の来館者の訪問を積極的に受け入れるのである。社会役割が徐々に変わってきた大学博物館は、標本コレクションの収集・保存・展示だけでなく、教育活動を通じて資料の活用に対しても努力している。また、デジタル・ミュージアムの設置や博物館の所蔵資料のデータ化などによって、より多くの人々に利用できるような施設となったのである。自校史を重視し、大学博物館の展示を通じて大学の社会的な位置、あるいは大学自体の存在を宣伝する校史館と檔案館の成立によって、台湾大学の博物館は“学外者を対象とする”という意味で現代の大学博物館へ発展しつつあることが理解できた。

台湾大学の博物館は、標本室から始まり、現在校史館・檔案展示室などの大学の歴史を保存・展示している博物館も設置した。近年、学内にある博物館を統合して大学博物館のネットワークを構成する博物館群の成立によって、学外の利用

者を重視し、積極的に対外発信し、博物館の施設でも活動に於いても鋭意充実図っているのが現状である。台湾大学の博物館群は、大学博物館は研究と教学という本来の目的と機能を維持しながら、大学と社会を結ぶ窓口となる可能性を明示している。しかし、現在の台湾大学の博物館を詳しく見ていけば、さまざまな問題が見出せると考えている。大学博物館が持続発展し続けるためには、大学博物館の運営をはじめとする複眼的な研究が必要であるのではないかと考えられる。

おわりに

今後、台湾における大学博物館の実態について広く知るために、中国文化大学や国立成功大学などが有する大学付属博物館の歴史と現況に着目し、現地調査や関係者のインタビューなどを行うことによって、台湾の大学博物館の設立の経緯・歴史・収藏品・展示形態・教育実態等をさらに明らかにすることにより、台湾の博物館の出現と発展に大学博物館は如何なる影響を与えてきたかを明確にしたい。同時に、近隣諸国の大学博物館と比較検討することで、現在の大学博物館の抱える課題について明らかにする所存である。

註

- (1) 野林厚志 2010「植民地国家から国民国家へ継承された博物館－台湾総督府博物館の設立と原住民族コレクション－」久留島浩・趙景達編『国民国家の比較史』有志舎 PP.277-299
- (2) 王嵩山 2010「台湾における博物館事業と博物館学の啓蒙」『日本キューリアム・マネジメント学会研究紀要』第14号 PP.1-5
- (3) 「關於博物館群：緣起与理念」<<http://www.museums.ntu.edu.tw/about.jsp>>（参照2018年6月20日）
- (4) 日下部文中に載せた「『台湾総督府博物館』設立の関連年表」に「1882年7月淡水（台湾）馬偕記念館」という記述に対し、馬偕の『台湾遥寄』によれば、讀書楼内の博物館について“My Museum”と“Museum in Tamsui”という言葉が使われたため、馬偕博物館あるいは淡水博物館と呼ばれたことを確認できる。日下部龍太 2016『『台湾総督府博物館』と教育政策』石井正己編2016『博物館という装置－帝国・植民地・アイデンティティ』勉誠出版 PP.122-137
- (5) Mackay, George L. (1895). Macdonald, James A., ed. From Far Formosa: the island, its people and missions New York: F. H. Revell Co. PP.287-288
- (6) 栗原祐司 2012「米国・台湾の大学付属博物館」青木豊編『「高度博物館学教育プログラム」最終報告』國學院大學研究開発推進機構博物館学教育研究情報センター PP.84-88
- (7) 陳政宏他編 2011『外国の月亮一樣圓 科技博物館与大学博物館的在地思考』国立成功大学博物館
- (8) 幣原坦 1926「台湾の學術的価値」『台湾時報』第12号 PP.25-26
- (9) 陳瑜 2004「日本統治下の台北帝国大学について（上）」『東洋史訪』兵庫教育大学東洋史研究会 第10巻 PP.66-79
- (10) 胡家瑜 1998「伊能嘉矩の台湾原住民研究与物質文化収藏」胡家瑜他編『台大人類学系伊能

藏品研究』国立台湾大学出版中心 PP.37-72

- (11)台北帝国大学文政学部史学科編 1936『台北帝国大学開学式記念展覽目錄』PP.58-71
- (12)中生勝美 2013「台北帝国大学土俗・人種学研究室の研究活動」酒井哲哉・松田利彦編『帝國と高等教育－東アジアの文脈から－』PP.115-127
- (13)欧素瑛 2007「素木得一与台湾昆虫学的奠基」『国史館學術集刊』国史館學術集刊編輯委員会編第14期 PP.133-179
- (14)本川雅治・于宏燦 2015「台北帝国大学の動物学研究－青木文一郎と哺乳類標本」『日本動物分類学会誌』日本動物分類学会編第39号 PP.25-39
- (15)林怡君「大学博物館における国際協働展示会の実践－IMT プレイベント2011－2012『台湾大学+東京大学モバイルミュージアム』の展示会シリーズを例として」<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/web_museum/ouroboros/v17n3/v17n3_hayashi.html> (参照2018年6月20日)
- (16)大即洋子・坂東宏和 2012「バーチャル博物館」小笠原喜康他編『博物館教育論 新しい博物館教育を描きだす』ぎょうせい PP.148-151
- (17)「台湾大学典藏数位化計画」<<http://www.darc.ntu.edu.tw/newdarc/>> (参照2018年6月20日)
- (18)「社会教育工作綱要」とは、1990年以降の社会教育の発展方向を、成人教育、家庭教育、文化教育、芸術教育、大衆科学技術教育、交通安全教育、図書館教育、博物館教育、視聴覚教育の9項目と確定した政策文書のである。
- (19)劉素真 1999「歴史的視座から見る台湾の博物館の役割」『美術教育学：美術教育学会誌』美術教育学会 第20巻 PP.433-440
- (20)二葉俊弥 2017「台湾の博物館制度の現状と課題－歴史・法制度の考察を中心に－」『國學院雜誌』第118巻第11号 PP.328-346
- (21)青木豊 2013「入館記念スタンプの必要と要件」『集客力を高める博物館展示論』雄山閣 PP.171-172